仏教企画通信
46号
発行日｜平成29年1月1日

発行所｜有限会社　仏教企画
〒252-0113
神奈川県相模原市緑区谷ケ原2-9-5
Tel.042-703-8641
Fax.042-783-0989
発行人｜21世紀の仏教を考える会代表
㈲仏教企画代表　藤木隆宣
Email｜fujiki@water.ocn.ne.jp

偶感あれこれ

2

駒澤大学名誉教授　佐々木宏幹

良寛さまの和歌から

手を折りて
昔の友を数ふれば
なきは多くぞ
なりにけるかな

良寛

「指を折って一人二人三人と数えてみると、古くからの友人は、亡くなった人の方が数多くなってしまった」

曹洞宗の僧であった良寛さまは、文人墨客（ぶんじんぼっかく）は言うまでもなく、一般の人びとからもよく知られ親しまれた仏教者である。現に各種メディアにしばしば出てこられる。

どうして良寛さまは現代を生きる人びとの心を惹きつけるのであろうか。いろいろな見方があろうが、私が感じるのは何物にも何事にも囚われない、実に「飄々（ひょうひょう）とした」生き方である。人を評するのに「彼の人は飄々乎（こ）として生きぬいた」などと表現するが、「飄々」は①「風が吹く音。風に吹かれて翻るさま」や、②「足下のふらふらして定まらないさま。当てもなくさすらうさま」そして③「世俗にこだわらず、超然としてつかみどころのないさま」を意味する（『広辞苑』）。良寛さまはまさに③の生き方であったとすることに大方異論はあるまい。

良寛さまは天保二年（一八三一）一月六日に七十四歳で遷化された。雪国（新潟県）に生まれ雪国に死した良寛さまは、当時としては長生きされた方であると言えよう。当時の日本人の平均寿命は五十歳前後であったろうからである。「人生五十年」という言葉は、昭和二十年（一九四五）頃までは常套句であった。七十歳を超えた人の目に「なきは多くぞなりにけるかな」と映ったのは、しごく当然であったであろう。

良寛さまが多くの人に慕われる理由の一つに、師が人生を「夢（のようなもの）」と捉えていたことを挙げることができるのはあるまいか。

「ゆめの世に　かつまどろみてゆめをまたかたるもゆめも　それがまにまに」（本来夢であるこの世に在って、さらにまどろんで見る夢を語ること自体も夢であるから、夢のままに生きよう）

「六十四年、夢裏に過ぐ、世上の栄枯は、雲の往還」（六十四年の人生は夢のように過ぎ去った。世間の栄枯盛衰は雲の往き還りのようなものだ）

「首（こうべ）を回らせば五十有余年、是非得失、一夢の中（うち）」（振り返ってみるとこの五十年余り、世間に起こるさまざまな出来事は、夢のようなものである）

「人生とは夢（のようなもの）にほかならない」という見方・感じ方は、言わば多くの日本人の人生観（感）の基調低音のようなものではなかろうか。

「夢」が好きな日本人

良寛さまが多くの人に敬愛され続ける理由の一つは、師が人生を「夢（のようなもの）」と見ていたからではなかろうかと記した。そして日本人は夢が好きな民族と言えよう。

本当にそうであろうか。これを証明するのはとても難しいのであるが、まったく手がない訳ではない。ここでは日本人の多くが好んで口にする流行歌、演歌を取りあげてみよう。テキストは野ばら社刊の『愛唱名歌』平成十七年（二〇〇五）である。この本には明治、大正時代から昭和時代までに歌われた唄が曲を付して掲載されている。

私が幼児であった頃に、あんちゃんたちやねえちゃんたちが口にしていた実に懐かしいものが多い。明治から昭和までの時代は概して「戦争の時代」であったが、本書には言わゆる「軍歌」は載っていない。以下引用する歌の夢の字には「」を付しておくことにする

「うさぎ追いしかの山　小鮒つりしかの川「夢」はいまもめぐりて　わすれがたき故郷」（『尋常小学唱歌（六）』、大正三年（一九一四）。作詞高野辰之・作曲岡野貞一で、高野は野口雨情や北原白秋、西條八十らとならんで多くの名歌を残した。

ちなみに野口の「黄金虫は金持ちだ　金蔵建てた蔵建てた　飴屋で水飴買って来た」や北原の「雨は降る降る　城ケ島の磯に　利久ねずみの雨が降る」、そして西條の「唄を忘れた金糸雀（かなりや）は　後の山に棄てましょか　いえいえ　それはなりませぬ」は、今日でも名作とされテレビでもしばしば放映されている。重ねて「ちなみに」だが、駒澤大学校歌の「新人立てり立てり竹は波うつ　晴れたりこの空この我駒澤　漲（みなぎ）る緑は光と渦く　旃檀林（せんだんりん）旃檀林　時代は正しく飛躍し来たれり　捉えよ輝くこの現実　我等が校旗は雲と起れり」は北原白秋作詞、山田耕筰作曲である。

なんとも素晴らしい歌詞であり曲ではないか。この歌詞と曲には人をして深く感動させる力があると思う。自分の母校の校歌だからということ

駒澤大学　昭和43年（1968）雪の日1・2号館（駒沢大学120年史より）

もあろうが、それだけでは決してない。なぜならば、私は早稲田大学の「都の西北」や明治大学の「白雲なびく」を耳にしても同じような感動を覚えるからである。凄い作品はやはり凄いのである。「夢」に戻ろう。

〈1〉「ああ玉杯に花うけて　緑酒に月の影やどし　治安の「夢」に耽りたる　栄華の巷低く見て　向が岡にそそり立つ　五寮の健児意気高し」（矢野勘治作詞・楠正一作曲、明治三十五年（一九〇二））。有名な旧制一高の寮歌「ああ玉杯に花うけて」である。この歌も凄い歌であり、年輩の人は自分も歌ったか、他人が歌うのを耳にしたであろうほど、よく知られている歌である。ここでの「夢」は良い意味で用いられている訳ではない。「安定した社会にのうのうと生きていることを「夢」に耽る」として批判的に見ているからである。「夢」は多義性をもつ語で、①睡眠中にもつ非現実的な錯覚または幻覚、②はかない頼みがたいもののたとえ、③空想的な願望、④将来実現したい願い・理想などを意味する（『広辞苑』）。さきに挙げた旧制一高の寮歌の「夢」は②または③に当たると言えよう。

〈2〉「都ぞ弥生の雲むらさきに……その春暮れては移ろう色の　「夢」こそひとときの青き繁みに　燃えなんわが胸想いを載せて……」（横山芳介作詞・赤木顕次作曲）。これも有名な北海道大学寮歌「都ぞ弥生の」であるが、作詞・作曲の時期は記されていない。ここでは「夢」は「ひとときの」だからこそ燃えようとしており、さきの分類の②と④に当たるだろう。

〈3〉「白雲なびく駿河台……」明治大学校歌の三番に「時代の「夢」を破るべく　正義の鐘をうち鳴らさん　明治」（児玉花外作詞・山田耕筰作曲、時期の記述なし）。ここでの「夢」は④を指しているように思う。

日本人が「夢」の語を好むという傾向は外国の詩や歌の翻訳にも表れている。たとえばシューベルトの子守唄は「眠れ眠れ母の胸に　眠れ眠れ母の手に　こころよき歌ごえに　結ばずやたのし「夢」」であるが、ドイツ語の原文に「夢（Traum）の語はどこにもない。訳者が勝手に「夢」を加えたのである。

アメリカ民謡の「峠のわが家」は「角笛はこだまする山のかなたに　わが「夢」は虹のごと　きらめき揺れるよ　ああ楽しきわが家」（藪田義雄訳、時期の記述なし）である。この歌にも原文には「夢」の字は見られない。

〈4〉太平洋戦争敗戦（一九四五、昭和二十年）後、まだテレビがなかった頃に大流行したのが「山小舎の灯」であった。その三番は「山小舎の灯は　今宵も点りて　独り聴くせせらぎも静かにふけゆく　あこがれは若き日の「夢」をのせて　夕べ星のごと　み空に群れとぶよ」（米山正夫作詞・作曲、近江俊郎歌（一九四七・昭和二十二年））であった。この歌での「夢」はまさしく③と④に相当しよう。

勇ましい「軍歌」の時代が終わって二年、日本人の誰しもがホッとすると同時に食べる物にも着るものにも事欠く悲惨な日々であった。そうした辛く暗い現実を吹き飛ばすように歌われたのが、明るくて軽快で、未来への憧憬を籠めたこの歌であったように思う。

唐突な話になるが、道元禅師も「夢」について述べておられる。『正法眼蔵』に「夢中説夢」の巻がある。「夢の中で夢を説く」とは、一体どういうことであろうか。

禅には「夢幻空華」という語があり、意味は「存在するように見えるが、実際には存在しないことのたとえ」とされる。これにたいして道元禅師は、「夢」も尽十方界真実人体（ありとあらゆる世界はそのまま仏の姿であり、仏性の顕現であること）であり、真実の世界であるとされた。仏教の悟りの視座に立てば、現実世界の在りようはすべて仏の姿であり、「夢」も例外ではないと言うことであろう。

表現の形式から見ると、かつて流行歌として大はやりした「喜びも悲しみも、みんな「夢」のなか」によく似ているが、「悟りの視座」と「世間の視座」とは大違いであることには厳しく止目する必要があろう。

消えゆく　思い出の人と場所

五十年近くなろうか、私が住んでいる横浜市青葉台はかつて緑の多い静かなところであった。いま高所に立って眺めると、その頃の風景はすっかり消えてしまった。どこもかしこも家、家そしてビルである。この状況を目にして「青葉台は発展した」と見るか、「青葉台は住み難くなった」と捉えるか、人さまざまであろう。

東急田園都市線が敷かれてから、この地は徐々に、そしてある時期から急激に都市化した。私が移り住んだ頃は、商店もレストランも病院も数少なかった。当然ながら人間関係は密であった。商店の店主、そば屋やレストランの店員やマネージャー、病院の医師とは互いに知已の間柄になり、「余計な話」をする余裕があった。駅近くにあった一杯飲み屋の主人は話好きな人で、客が誰もいなくなっても相手をしてくれた。

Ｉ医院の院長さんには大変お世話になった。どこか具合が悪くなると訪ねるのはＩ先生であったからである。先生を訪ねると必ず口に出るのは「今日はどうされました」という言葉であった。先生は東大医学部出の内臓外科医であったが、患者たちとはよく話す方であった。待合室で知りあった患者さんと長付合いを続けたこともある。現在、よく通ったそば屋は経営者が替わり、お寿司屋はどこかへ去り、Ｉ先生は亡くなられた。

緑が多く人家も疎らであった静かな青葉台はこの五十年間に大きく変わった。バブル期の頃に「高級住宅地青葉台」などとメディアが宣伝したことも一因であると指摘する人もいる。バス通りの両側には点々と住居が建ち並び緑に富んでいた地は、家々がぴったりと接しているところとなり、道の両側に樹木や植込みはほとんどなくなった。私がかつてお付合いをし、立ち話をした人たちの多くはこの世を去り、存命していても老人ホームに入ったり、転居したりで、散歩していても挨拶する人はほとんどいなくなった。病院も増えたが、どこも混んでおり、先生（医師）と余計な話などできる状態ではなくなった。平屋建てや二階建ては姿を消し、代りに、コンクリートの五・六階建ビルが多くなった。

私の目には青葉台は「住み難いところ」となった感がある。毎朝駅に向かうサラリーマンたちは颯爽としているが、こちらはしょぼしょぼである。去年、今年とこの世を去った友人、同僚は少なくない。往時を想うと寂しさがこみ上げてくる。これを「無常感覚」と言うのであろうか。良寛さまの気持ちがよく分かる気がする。再び冒頭に引用した歌を記そう。

手を折りて
昔の友を数ふれば
なきは多くぞ
なりにけるかな

出雲崎の良寛さま

お寺は地域社会の核になれるか

地域の中で地域をつなぐ場所として存在してほしいと、今、寺院としての役割が求められている

出席者（五十音順）
内山節（うちやまたかし）
久間泰弘（きゅうまたいこう）
平子泰弘（ひらこたいこう）
吉澤保幸（よしざわやすゆき）
司会・藤木隆宣

藤木　今日は哲学者の内山先生、地域の活性化ということでご活躍の吉澤さん、曹洞宗総合研究センターの平子さん、同じ曹洞宗のなかで福島の復興支援室分室主事を務めておられる久間さんという四人の方々にお集りいただき、「お寺と地域社会」というテーマでお話合いいただければと思っております。早速ですが、内山先生は群馬県の上野村にお住まいになって、遠くは鹿児島とか、近くは高崎とか、いろいろなところで講演をなさっておられます。先生に対して、お話の内容ということで何か注文というようなものはあるのでしょうか。

内山　僕の場合は、何でもありみたいな感じですね。経済問題から多少国際問題に近いもの、それから物の考え方みたいなものから環境問題があったり。ただ今日の、地域をどういうふうにつくるかというテーマは、今かなり広くいろいろな人たちの共通関心になっています。これからどういうふうに地域をつくっていったらいいか、それは自分たちがどう生きていったらいいかということに共通しているのかなという感じがしますが、具体的なテーマはさまざまと思っています。

内山節

【地域に埋もれている資源を掘り起こす】

藤木　吉澤先生はいろいろな団体の役員をやっておられ、あるいは市の政策参与なんかも務めておられますけれども、その前は日銀におられた。日銀を中途退職されて、こういう活動に入られたわけですが、その辺のところ、自己紹介を兼ねてお話しいただければと思います。

吉澤　私は昭和三十年、新潟県の高田に生まれまして、お寺の宗派で申しますと浄土真宗大谷派になります。ただ、最近は高野山で私の関係する団体の大会を行ったりして、真言宗の方とのお付き合いもでき、また金峯山寺、修験道の総本山ですね、その田中利典長老ともご一緒したりという、そういう意味では極めて日本的な人間でございます。

中学は地元、高校も新潟でしたが、東大法学部を出て、昭和五十三年に日銀に入りました。ちょうど二十年勤めたところで山一証券の特融という、金融危機の最後の始末をやったときに、大蔵省と日銀をめぐるスキャンダルがいろいろあって、その責任を取って日銀を辞めました。そうして普通の社会人になると、何も手に職がついていないわけで、社会人の大学院に二つほど行きながら、税理士の資格を一応は取りました。ところが、今ほとんど税理士の仕事はしておりません。一つは雑誌・チケットの「ぴあ」という会社、そこの株式上場の手伝いをする過程でかかわりはじめて、今もぴあの役員をしております。

一方で二〇〇二年ぐらいに、たまたま地域を元気にしたいという仲間たちと知り合いました。その当時から、地域通貨というものが地域を活性化する一つの手段になるんじゃないかといわれていましたが、でも本当にその当時考えた地域通貨でいいのだろうかという問題意識を持った人たちです。

私自身も九八年に日銀を辞めたときの思いとして、どうも戦後の護送船団的な上から目線の金融に対して、ある意味では国民がそれでいいのかという問いを投げつけたとすれば、もう一回金融というものを自分の手に取り戻したい、ボトムからもう一回金融をつむぎ直したいなと、そうしないと日本の金融機関は駄目になる、そんな問題意識もあったんです。お金が自分たちの目の前できちんと自分たちのものとして回る、いわばお金に命を宿すような、そういう使い方がないものかどうかということですね。

そういうことを仲間たちと語り始めたのが、われわれ「場所文化フォーラム」という任意団体を立ち上げるきっかけとなりました。今は一般社団法人になりましたが、二〇〇三年に発足した時は任意団体で、商工会議所の青年部の仲間たち、というのはいわば地域の中小企業の二代目とか三代目になりますが、そういう連中が全国の地域を元気にしようと、どうしたら地域が活性化するかということにかかわっているわけです。

どうも東京というのは、札束ですべて賄えると思っているけれども、実は地域によって支えられているのであって、その一方で地域には何もないと思われているけれども、地域に埋もれている、今の言葉でいうと地域資源があります。それは、それぞれ地域が特徴的に持っている生活様式であったり、豊かさの指標である自然とか、人々の関係性であったり、そういったものをもう一回よみがえらせることこそが日本を変える動きになるのではないか。それをわれわれは「場所文化」と呼んでいるわけで、私もそういう地域の活性化に半分かかわって、十数年続いております。

場所文化ということでは、一番目に見えるものは食文化といえます。そこで食文化を東京のど真ん中で体感できるような場所をつくろうと、二〇〇七年六月に「とかちの・・・」というお店を開き、二〇一〇年には「にっぽんの・・・」というお店を開きました。これは都市と地域の相互がきちんと対等にかかわり合うような場所づくりをしたいと、それを補助金じゃなくて、自分たちのお金で支えられるような、そんな仕組みづくりで活動しているということでございます。月の半分ぐらいは、関係する地域に行ったり来たりしながらやっております。

そうした過程で内山先生と面識を得て、また別のＮＰＯの活動でもご一緒することになり、それこそグローバル資本主義が抱えている問題をどうやって解決していくかというような議論もお話しさせていただいています。最近は大学生や高校生とも少しずつ語り合いをして、教育といった問題も、どうとらえていくかということの問題意識を持ちながら活動をしております。年に一回、ローカルサミットというものをやっていまして、今年は倉敷で第九回目を行います。どうも政府の流れとはちょっと違う世界を、きちんと足元から見ていかないと駄目だということで活動をしている、そんなことでございます。

【宗勢総合調査と復興支援活動と】

藤木　平子さんは曹洞宗総合研究センターの研究員を務めておられますが、そこではどういうことを目指されているのか、また群馬県安中の桂昌寺さんのご住職でもいらっしゃるので、今のお話の地域資源ということでは、お寺には資源があるのかどうか、あるいは資源があるとすればそれが活用されているのかどうか、今日はそんなところもお話しいただければと思います。

平子　曹洞宗総合研究センターというところは研究から実践まで、何でもやっているところでもあるのですが、私は学生時代にインド仏教を専攻していましたので、そちらを専門としながら宗学もやり、また現代的な問題も課題となりますので、いろいろなプロジェクトにかかわらせてもらっています。その一つに、十年毎に行う宗勢総合調査があります。永く佐々木宏幹先生に指導していただいているものですが、曹洞宗の各寺院がどんな状況にあるかということを調べ、そこから曹洞宗全

体が社会の中でどういう状況にあるかということを分析させていただいております。

紹介いただいたように群馬県安中市にある寺院に生まれまして、そこの住職になって十年ぐらいになります。ただ、平日は研究センターへ出て参りますので、土日だけの住職でして、檀家さんに理解してもらいながらやらせてもらっています。そこでの住職としての目線と、研究員としての目と、両方に重点を置いて、指摘をしたり、提案をしたりということができればいいなと思っています。現場からすれば、研究どおりには行かないという現実もあるので、そんな現場と研究と、どっちつかずといわれるかもしれませんが、両方に足を置いてという立場で務めているようなところであります。

藤木　ありがとうございます。具体的なお話はこれから伺うとして、もうお一人、福島からおいでいただきました久間さん、現在、東北の復興支援でご活躍の一方、やはりお寺のご住職もなさっておられる。その辺の支援活動も含めて、地域社会の問題点といったところをお話しいただければと思います。

久間　私は今お話があったように、福島県の県北部に位置する伊達市で住職をさせていただいております。それに東日本大震災の被災三県と言われています、岩手・宮城・福島の復興支援活動、そのボランティア活動のセンターが福島市の駅前にありまして、そちらの復興支援室分室の主事を務めております。

宗内ですと、寺院の復興等々は制度上の問題もありますが、分室に限って言いますと、地域の復興について、一般の方と一緒になって僧侶宗教者が復興支援活動に従事していくということになります。私たちは現地で困っている方々に対し、または何かしら地域の復興に役立つようにと、協力をさせていただいているということです。

その前に、二〇一一年三月のときには、曹洞宗には全国曹洞宗青年会という、北海道から鹿児島まで、約三千人の会員を集める任意団体の会長を務めているときに大震災が起こったものですから、即時、伊達へ戻り、現地本部を立ち上げて、それから全国の仲間とともに活動を継続しているわけです。二〇一三年五月から復興支援室は宗務庁本部のほうに全体的に移管されましたので、その後は支援室分室の現職にあるということになります。

分室の支援復興支援活動というのは常に受け身の姿勢でして、その多くは地域住民や、行政・社会福祉協議会の方々からの要請で出掛けていくことになります。今回の東日本大震災はこれまでの震災と大きく違い、行政と宗教の垣根が非常に低くなったというか、言ってみるとボーダーレスというより歩み寄り、融合を見せたというところがあると思います。そういったところで、お互い提案をし合いながら、被災地または被災者の方々が今何を求めているのか、何が必要なのか、何ができるのかということについて、日々頭を悩ませながら活動を続けているということです。

伊達市は地震とともに放射能被害が非常に大きくありまして、私の住職地もかなりの広範囲が特定避難勧奨地点に指定されて、今でも避難生活をされているお檀家様がおります。ですから震災以前に比べると、正直なところ寺院のいわゆる仏業とか檀務というものはだいぶ減少しつつあります。ただ、そういった中でも坐禅会とか、また梅花というご詠歌ですね、そういった活動を、こういう時期だからこそやめないで続けたいという方もおられますので、そういったところに月何回かの教化活動を住職としてお務めをさせていただいているというのが現状です。

お寺に求められるのは第一に仏事

藤木　先ほど平子さんからお話があったように、曹洞宗では十年に一度、宗勢調査をやっております。これは佐々木先生からお聞きしたことですけれども、檀家さんのニーズというのは、しっかり仏事を務めてもらいたいというのが第一であると、供養をしっかりしてほしいということだそうです。しかし、これから時代が変わって、人もどんどん変わってくるでしょう。だからお寺を見る目も、あるいは住職を見る目も変わってくると思いますが、そのあたりどうでしょう、平子さん、お感じになっていらっしゃるところがあれば。

平子　宗勢調査では住職に答えてもらっていますので、住職の目から見たお寺の状況や意識などのまとめになります。それだけでは住職の目を通した一方的、一面的なところしか見えてこないだろうとの議論になりまして、二〇一二年に檀信徒さんがお寺や住職のことをどんなふうに思っているかをアンケート調査し、『曹洞宗檀信徒意識調査報告書』としてまとめました。各地域の教区長老師にお願いしまして、檀信徒さんのいろいろな年代、二十歳代から高齢の方まで、男女さまざまな人に回答をお願いしたわけです。

今、端的におっしゃっていただいたように、お寺としての役割、お寺に何を求めるかというと、第一には仏事です。お葬儀、法事をきちんと行ってほしいということ。その一方で十年ぐらい前からでしょうか、寺院における社会的な活動への期待が、公益法人化改革の流れの中で論じられました。そういったことも含めて、「お寺に求められる社会的な活動は何だと思いますか」とのたずね方をしましたが、それでもやはり、お寺にまず求めたいのは仏事であり、葬儀であり、年回法要であり、あるいは仏教的な行事であるとだと思います。それぞれのお寺の状況でできること、できないことがあるでしょうし、それぞれの住職の資質もあるでしょうから、必ずどこの誰でもできるというものはないかもしれません。しかし、いろいろな取り組みを知ることで、うちでもやってみようかなと考えられると思います。最後はそれぞれの住職のやる気というか、その気がないと始まりませんし、続かないと思いますので、そういう意識を喚起していこうという動きに今なっているところだと感じています。

久間泰弘

藤木　私なんかも曹洞宗の一員ですけれども、宗派を運動体として動かしていくためにはそこに一工夫ないと、具体的になっていかないような気がします。

平子さんからご紹介いただいた『一寺院一事業の手引き「生き生き寺院」入門編』ですが本を配るだけでは運動体には育っていかないと思います。宗門にとって大事な事業であればどのように展開するかまで企画して進めていただきたいと思います。

内山先生からご覧になって、お寺というのはどういうふうに映っているでしょうか。

内山　僕も祖父が曹洞宗の僧侶でして、名古屋のお寺ですけれども、永平寺で修行した僧侶だったんですね。父が長男でしたから跡を継ぐ話があったようですけれども、途中から違う方向に行っちゃって、父の弟に当たる、僕から見れば叔父さんが跡を取ったわけです。ところが、そのまた息子が跡を継がない、ということでお寺は続いておりますけれども、私のうちとしてはつぶれてしまった。それはともかく、僕自身はお寺的な雰囲気は全くなく育ちました。もっとも祖父がなぜか僧侶になりたくて、修行をしてお寺に入ったというので、代々のお寺ではないんです。

もともとお寺は地域の核であった

藤木　曹洞宗のお檀家だったんですか。

内山　うちはもともと三重県の桑名ですから、どう見ても浄土真宗高田派の、しかも非常に熱心な檀家さんだったらしい。ですから、なぜ祖父が曹洞宗に移ったのかもよく分かりません。僕が二歳ぐらいのとき亡くなっていまして、というのは祖父も父も結婚が遅かったもので、結構それなりには生きていたと思いますけれども、実は僕は祖父のことをあまりよく知らないということです。

僕は群馬県の上野村という村の人間でもあるので、上野村は天台宗のお寺が一つと曹洞宗のお寺が三カ寺ですが、お坊さんはみんな逃げ出してしまった。すべて無住寺です。お葬式があるとやってきて、お経上げが終わると帰っていく、当然、村の中では評判は悪いようです。村の人たちは、少々大変なことがあっても、そう簡単には逃げ出すわけにはいきません。進学のために村を出て、例えば東京に住みつくとか、そういうことはあるでしょうが、村にいれば何があっても工夫しながら村で暮らすという努力をするわけです。ところが、お坊さんは割と簡単に逃げ出してしまう。確かに経営が成り立つような地域ではないというのはよく分かりますけれども。

だから、日本はそういう地域が結構多いと思いますが、お寺をどうするかということは同時にその地域でどういうふうに暮らすかとか、地域でどういうふうな営みをするのかということでしょうけれども、そこにだんだんこだわらなくなってきたお坊さんもいらっしゃる。一方で、都市部なんかですと、だんだんお寺の基盤自体が社会的に崩れていくような、そういう時代でもある。ただ、そういうのを見ていて、僕自身は家としては曹洞宗ですけれども、さっきの吉澤さんのお話と一緒で、いろいろな宗派の方とお付き合いをしていて、本当に日本人的というか、何とでもお付き合いしますという、そんな感じです。

そうしていろいろなところとお付き合いをしていて、日本の仏教というのは教団が先ではないなと思うようになりました。もちろんそれぞれの本山という意味では、かなり古くからあるわけですけれども、地域の人たちにとって、あるいは地域のお寺を今まで守ってきた人たちにとって、もちろんあえて聞けば何々宗ですし、そうすれば当然本山もあるでしょう。しかし、そちらが先行したのではなくて、地域のお寺として生きてきたという、それが先だと思っています。

地域のお寺だったものが、江戸期になるとどこかの宗派に入らないと都合が悪くなってきた。それからまた本山のほうからすれば、ある程度教勢も伸ばすみたいなことが試みられますので、一面では寺の取り合いもやるわけです。だけどその一方で、日本のお寺は宗旨替えが結構多くて、結局それも地域のお寺、地域の人たちのよりどころという、そういう形だったから、もし今の本山との関係に不都合が発生すれば、簡単に宗旨替えをする、そういうお寺も結構たくさんあったと思う。

ですので、これからちょっと考え直さなければいけないと思っているのは、僕らは仏教という言葉を聞くと、まずイメージするものは開祖です。例えば、釈迦という人がいるところから始まったとしても、文章的に読むというと、例えば親鸞だったり道元だったり、そういう開祖がいます。開祖の教えが今も守られているのか、守られていないのかとか、そういう式の議論が多い。だから、例えば真宗系だったら親鸞に戻れと、そういう言葉が使われていくし、また特に親鸞について言えば、必ずしも浄土真宗ではない人たちからの親鸞人気みたいなのが絶えずあって、その人たちにしても親鸞は素晴らしいから、親鸞に帰るべきであるみたいな、そういう発想だと思うんです。

そうすると忘れられてしまうのは、そこの場所で生きている人たちがお寺を守ってきたということ、この世界は必ずしも教団でもないし、開祖でもない。上野村のお寺もそうですけれども、天台宗のお寺があるといっても、その檀家さんたちが最澄の何かを勉強したなんていう話はあまり聞かない。曹洞宗のお寺の檀家さんたちも、非常に熱心な檀家さんだったとしても、道元を読んでどうかしたという人は少ないだろうと思う。そうであっても、お寺は自分たちにとっては大事なもので、地域の生きるときのある種の核だった。それに応えていくのが住職さんたちの仕事で、時にはこの宗派でこんなことをしますかというようなこともやっていた。僕はそれが当然だろうという気がするんです。

どうも近代人の発想だけれども、何か教義・教団があって、そして勉強しようと思うと、すぐ開祖のところに戻っていく。この在り方自体がちょっと間違ったかなという気がしています。もちろん開祖以降の勉強をすることはそれでいいですけれども、地域とともに暮らしたお寺なのだという、そこの部分が二の次になっちゃうと、日本の仏教の在り方の根本を読み違えてしまうのではないかなという気がします。

復興活動の中でお寺の役割が分かった

吉澤　私の生まれた新潟の高田は親鸞が流されてきたところでもあるので、子供のころからいつもお寺さんがうちの実家に来て、うちのおやじとおふくろはずっと仕事をしていたものですから、一人っ子の私はばあちゃん子で、だからお寺さんが来てお経を上げているところに、ばあちゃんと二人、横に坐ってそれを聞いているというのが日常茶飯事でした。お寺さんも月に一回ぐらいは来られたので、非常に身近な存在だったんですね。

たまたま今年はうちの親の三十三回忌でした。数年前にお寺の住職が脳梗塞で倒れて、まだ息子さんが若かったものですから、今年の法事はどうなるだろうと思っていたら、ちょうど去年その息子さんが得度されて二十五代目を継がれて、ささやかな仏事をつなげていただいたことには本当にほっとしたわけです。ですから、個人的なものとして見ると、きちんと仏事を伝えていただきたいということ、宗勢調査の結果はよくわかりますね。それからいろいろ聞いてみると、本当にお寺さんも後継者がいらっしゃらなくて、そういう中で今後どうなっていくのか、田舎で見ていてもちょっと心配なところがあります。

特にお寺というものの存在をまじめに考えたのは、富山県の南砺市で集まりがあったときのこと、ご存知のように、富山県南砺市というのは浄土真宗の、ある意味では一向門徒の聖地みたいなところです。そこで地域づくりをやっているリーダーがいわゆるお檀家を持たない、道場を持っていらっしゃる浄土真宗のお坊さんで、大谷大学卒で仏教史がご専門という、そういう方が地域づくりのリーダーなんです。そこの市長も毛坊主でいらっしゃって、息子さんも得度されています。その南砺市の地域づくりをやっているとき、それを支えているのは、実はあそこの門徒宗が毎月やっているお講という会だった。お講の文化が今でも脈々と根付いています。

それぞれの在所ごとに必ず月に一回集まって、悩み事や苦労話などいろいろお話をされるようです。私がうかがったときには、そこの住職に頼まれて、二十人ぐらいのお講の人たちを前に初めて別院の中で、地域活性化のお話をさせていただいた。その後、庫裏でみんなで酒を飲みましたが。南砺の人たちに聞いてみると、お講を仕切るのはおじいちゃんおばあちゃんの役割だそうで、若い世代は口出しできない。それは一カ月順番で回ってくるので、それを励みにしながらやっているという。ですから地域共同体をつくっていく上でのお寺の役割と言いますか、お講という集まりが脈々と残る格好で息づいている、そのことを実感したのが一番ですね。

二番目はさっきの久間さんのお話で、私もたまたま南相馬と関係があって、南相馬の復興アドバイザーをさせていただいています。これも実は南砺とのご縁で、旧中村藩に砺波の移民が一七八〇年代から二万人ぐらい行ったわけですけれども、そのご縁もあって、結構砺波から移民が行っていた。移住者ですね。それもみんな門徒衆ですけれども。そんなようなこともあって、南相馬と南砺市というのは非常に関係が深い。それで南相馬の復興アドバイザーをやって、南相馬みらい創造塾というのを市長の肝いりで立ち上げて、その講師をさせていただいたこともありますが、そのときに会った若いお寺の住職が、復興活動の中で初めてお寺の役割が分かりましたと言った。

要するに、お寺はいかに人が集まる場所であるか、いわば外に開いた存在であるということをどうも忘れていたように思いますという。それまで檀家さんとのつながりだけだったけれども、本来はそうじゃないですねと。もっともっと、どこでもいいから祈りを、いわば亡くなった方に対して供養したい人たちのために、お寺を開いていったらいいんじゃないですかと言ったら、そうですねと、縁台のところでも寄り集まってやるとか、そういうのは少しずつやろうと思いますと、そんなことを言っていました。地域の中で心のよりどころを、あるいは語り合う場をつくるのがお寺の大きな役割なんだろうなと、地域づくりと絡めると強く感じますね。

平子泰弘

お寺イコール僧侶ということの意味

藤木　久間さん、どうですか。復興支援の主事というお立場で、三・一一が境になって、お寺側としても考え方がだいぶ変わってきたのではないかと思いますが、その辺、今やっておられることと重ね合わせて、どうでしょうか。

久間　そうですね。非常に大きい災害でしたので、一万六千人からの方が亡くなられて、まだ行方不明の方も多いわけです。被災地に行けば、一般のボランティアの方もだいぶ減りましたけれども、まだおられます。僧侶が足を運べば、僧侶に求める声というのも現実的にあるわけですね。そういったときに、私たちは教えを説くのではなくて、被災されて本当に大変なところにおられる方々に、逆にお話しをお聴きするということが当然ながらあるわけです。そういったところで、多くの仲間が何かをしなければならない。結局それはお寺から出て、実際の現場に行くということですよね。

今回のテーマのお寺と地域社会ということでは、お寺というのはイコール僧侶だと、私は思っています。お寺のあり方と僧侶のあり方、そこの乖離があるからいろいろな問題が起こってくるわけで、例えばお寺は私自身だ、私自身はお寺であり、地域とつながっているという一体感。そこのところ整合性を持って活動していくことが大事だと、震災のときも感じました。私は永平寺で修行をさせていただきましたが、そのときに百八歳の禅師様という、宮崎奕保禅師がおられました。宮崎禅師がよくおっしゃっていたことです、私が永平寺なんだと。これは禅師が常におっしゃっていましたね。

そのことは修行しているときには、あまり意味合いを体感できることはできなかったんですけれども、地元に帰って副住職、住職をさせていただく中で、また地域社会、お檀家様とのお付き合いの中で、例えばいろいろな喜びもあるし、いろいろな悲しみがある、苦しみがある。そういったところで、お寺に来てお話をしてくださることであったり、泣いたり笑ったりということを共有することによって、お寺の役割と僧侶の役割が一体になる。禅師のおっしゃった意味はこういうことかと体験したわけです。それは震災の活動でも全く変わることなく、地域社会とともに一緒に考えられるということが大事なのだということです。

あとメンバーシップ、共益というところを私たちはずっと意識してきたわけですけれども、本来宗教というのは公益的であるべきで、その辺をこの震災でお檀家さんにお話しすることが増えました。震災復興も寺檀ともに取り組んでいきましょうと。寺院と社会活動のイメージがあまり判然としないとすれば、それは地域社会で共有されていないからだと思う、僧侶としても、地域の一般市民としても。その辺を共有していかないと、共通言語で考えていかないと、それは動いていかないなというところは常に感じています。そこにずれがあっては駄目なんです。

例えば、社会活動をお寺とか僧侶に求めていくときに、何でリアリティがないのかなというところを考えますと、それはどちらか一方が実行するべきだという考えがあるからだと思っています。吉澤さんのおっしゃる講ですね、ともに活動することによって、つながりが持てますし、癒しの場ができたりする。その辺のところ、やはりずれたままで議論を進めても、形としてはなかなか動いていかないというのは、震災の活動を通じてもより強く実感するところです。

講の力を現代に生かしたい

藤木　お寺の社会活動ということですが、地域の人たちをいかに仲間としてつくっていくか。平子さん、いかがですか、曹洞宗の取り組みとなりますと。

平子　今の皆さんのお話を聞いていて、人と人とのつながりというのが何より大事だというところが共通しているのではと思います。私自身も同じ考えで、卑近な例ですけれども、夏休みに近所の子供たちをお寺で一泊させるということをやっています。私の子供もまだ小さいので、子供どうしのつながり、地域のお母さんたちのつながりがあって、何年か続けることができています。これを例えば一方的にこちらが開催すると企画するだけでは多分集まらないでしょうし、住職の思いだけでは空回りしてしまうように思います。地域の人たちとのつながりの中で、活動が出来上がっていくというのが一番自然というか、そこでお寺の存在価値というのが生きていくのではないかと、そんなふうに思っています。

そういう意味では、講の力というのは、今までの曹洞宗の歴史の中を見ても大きかったと思います。青森県むつ市で、寺を通じて町おこしをしている友人がいますが、彼はまさに講の力というものに着目しています。かつてはお寺の門前の地蔵堂などを通して、講活動が盛んだったわけですが、なかなか世代交代がうまくいかず、維持していたお年寄りも少なくなっていく中で衰退してしまっています。それをうまく現代の人々のニーズに合わせた形でまた復活できないかとの思いで、彼は試行錯誤しています。

今でも多くの梅花講が活動し、各地には地蔵講やさまざまな講は残っていても、だんだん下火になっているといいます。強制的な参加ではなく、人と人とのつながりが適度に保てる、そうした活動が地域の中で大きい力を持っていく可能性は、今までの講が展開してきた歴史からも大いにあると思いますか、現代に合った講といいますか、現代の人たちに合った形でそれを提供できれば、また地域の中でつながる力を持っていけるのかなと感じています。

藤木　講というと浄土真宗系統の印象がどうしても強くて、それは継続は力なりといいますか、本当に大きな力になっていくということは今でも思いますね。曹洞宗でそういうものをつくっていくというようなことは……。

平子　曹洞宗としては、これまでの既存の存在として認識しているでしょうが、全体として講の持つ力という視点はまだ持ち得ていないのではないかなと思います。

藤木　梅花流のほうも一時は二十万人とか、今は十五、六万人くらいでしょうか。

平子　規模は大きいんですけれども、中身は減りつつあるという話ですね。

藤木　その辺も伺っていますが、梅花流は、何とか育っていってもらいたいところではありますね。

平子　その問題は曹洞宗だけではなくて先日、参加させていただいた智山派での研修会でも話題にあがっていました。講活動をどうやって維持し発展させていこうか、どうしても会員が減ってきているなど、そのあたりのことが現場の声として出てきているようですが、具体的な解決策がなかなか見つからないようなお話でした。そのあたりは各宗派ともに摸索し続けているところのようです。

コミュニティの中心にお寺がある形

久間　講にしても、梅花講にしても同様と思いますけれども、地域の方とどういうふうにお寺がつながっていくかというところが一つの視点だと思うんです。私自身、梅花流の師範を務めさせていただいていまして、講員をどうやって増員しようかという話がいつも出てきます。じゃあ、どういった人がどういったときに自分で入ろうという意志をもつのか、そういうところの議論が足りない部分があるということは思います。私のところもそうですし、近くのお寺でもそうですけれども、曹洞宗のお檀家さんだけが入っているわけではないんですね、実は。

他宗のお檀家さんでも近しい人を亡くされるとか、親しい方のご紹介ということとか、あるいは何かを感じられて自分で入ろうと思われたとか、そういう方がおられます。それは他宗でも曹洞宗でも関係がない。そういったところの共有といいますか、その辺を感じて、とらえていく必要があると思っています。それが個人の僧侶から、例えば県単位の活動にしていくとか、結果的には教団に上がっていく。教団から下に下りるのではなくて、個人から教団にそういったことを共有していくために、意識と情報を集めていく必要があるなというように思いますね。お寺が活性化していくための一つの基本的なアプローチの仕方というか、視点だなというふうに思うんですが。

吉澤　先ほどの話と関連しますが、通常の暮らしの中にいろいろな学びを組み込んでいくというやり方が当然あるだろうと思うので、自然とどうやって触れ合うかというところを、例えば昔の自分のことを考えると、昔はお寺の境内で大体遊んでいて、住職にいつも「おまえ、何やっとんだ」といって怒られた。お寺に行くと怖いけれど、時々何かお菓子をもらえると、そういう一つのたまり場だったわけですね。一つのコミュニティの中心だったわけです。

自然とのつながりをどう取り戻すかとか、それをどうやって子供たちに、若い世代に伝えていくかと、そういうことを考えると、例えばお寺のご住職が一緒になって自然を体験するとか、あるいは最近ですと意外なことに中学、高校で一つの教育手法として動き始めているのは演劇とかダンスとか、要するに表現をどうしていくかということです。ある意味では、お経も一つの心の表現の仕方というふうに読み替えると、仏式の作法とか所作というものは一つの形であり、お寺が子供たちに教えることのできる、文字によらない非文字の教育だと思う。そういう日常教育みたいなものを教える場にお寺がなれば、それが地域づくりと連携していくと、僕は結構力になっていくだろうと思っています。

僕らは今、都会の暮らしというよりも、かなりローカルな話をしていますので、都会は都会でもうちょっと違うのかもしれませんけれど。ただ、そういう意味でのお寺の役割というのはすごくあるなということです。さっき久間さんがおっしゃったように、田舎ですと宗派というのは実はあまり、「おれ、何宗だったか」みたいな人が結構いて、「確か仏教だよ」という世界ですね。一方で、葬式になると、うちはどうも神道でしたみたいなことをおっしゃる。

そういう意味で、復興支援のとき久間さんも感じられたと思いますが、神社の禰宜さんとか、ああいう方々がすごいリーダーになっていましたね。あれは一つのコミュニケーションの取り方といいますか、ああいう取り方が一つの求心力になったのかなと思う。内山先生とも今ずっと、新しいコミュニティをどうやってつくっていくかと、いろいろ話しているわけですが、一つの心、あるいはご先祖様とか、すべての神仏を含めて一つの祈りみたいなものとつながるような形、それには、コミュニティの中にお寺さんがあるという形でとらえていくのが、地域から見たときにすっと入っていけるような感じがするんです。

お寺は縦横のつながりが結びあう場所

藤木　いろいろな会合の中でよく耳にする話ですが、われわれが常識と思っているところが今の子供たちに伝わっていない、例えば挨拶とか礼儀とか、畳の上の生活というものも一般家庭からなくなりつつあるようです。そういうものは結構、お寺が持っている資源になるのではないか。となりますと、それをいかに子供たちに伝えていくかということですね。

吉澤　子供たちは何らかの行事の中で覚えていったんでしょうけど。

内山　そこにお寺さんが絡まなくなっちゃった。

吉澤　それが寂しいと思います。

内山　例えば、仏教とキリスト教というふうにした場合に、もちろん考え方も違うし、違いはいっぱいあるけれども、一つ大きな違いとしてキリスト教には本山があります。カトリックだったら依然としてローマが本山ですから、例えば南アメリカのどこかの国のどこかの村に教会があっても、場合によってはローマのほうで、その考えは間違いだとか、異端だということがいえます。ところが仏教では、そういう意味での本山がない。北インドに発生したといっても、北インドにバチカンのようなところがあるわけではないし、つまり仏教は伝播していったその場所その場所で再確立していくという性格が強いんです。

インド仏教はインド仏教、中国仏教は中国仏教だし、日本仏教は日本仏教です。ある種の共通性は持っているとはいいながら、それは土着化するといってもいいし、土着のものが受け入れるというふうにいってもいいでしょう。日本の国内でいえば、もちろん宗派ごとに本山があってということではあるけれども、またそれぞれのお寺がお寺のある場所で土着化するという、あるいは土着の人たちに受け入れてもらうということでもあるわけです。そうすると、一応本山とのつながりは持っていても、それ以上に地元の土地とのつながりのほうが強い。本来、仏教というのはそういうものだったと思うんですね。

それともう一つ、地域の人たちのよりどころという話になると、よりどころというのはつながりがあるからよりどころになるわけで、そのつながりというのは、横のつながりと縦のつながり両方あるわけです。横のつながりとしては、まさに地元の人間同士のつながりであり、自然とのつながりもあり得る。人間というのは自分の生きている世界みたいなものにある種の安心を感じるとか、ある種の充足感を感じるというのは二つのつながりが必要で、一つは今言った横のつながり。もう一つの縦のつながりというのは、先祖とのつながりだったり、あるいは先祖よりもっと昔とのつながりだったり、その昔とのつながりを感じるから、未来とのつながりも感じるということだと思うんです。

ですので、縦のつながりと横のつながりみたいなものの結節点というか、両方持っている場所というのはお寺だった。だから一時期、今のお寺は葬式仏教だというので、えらい非難を浴びました。確かに、あこぎな葬式仏教というのがないでもないけれども、そういう極端な話はいくら何でも考え直してくださいということですけれども、僕自身はお寺は法事とか、お葬式とかむしろやっていくべきだと考えています。というのは、それを通して縦のつながりを確認していく場所になる、それが仏教の教義にあるのかないのかどうでもよくて、そこで生きている人たちが縦のつながりを感じ、横のつながりを感じ、そこに安心感もあり、自分の生きる場所を持つことになるわけです。

日本の仏教の場合、明らかに縦横のつながりを人々は求めてきたわけで、そこでお寺はそれに応えていた、それで

僕はいいと思っています。むしろ自信を持って縦のつながりというのを考えなければいけない。そのときに自分のうちの法事やお葬式だけじゃなくて、地域の縦のつながりとかいろいろあるわけで、そういうものがある種、行事として行われてきたと思うんですね。そうすると、その行事をどういうふうに維持するか、あるいは消えちゃったものをどう復活するか、同時に横のつながりのところで、人々がお寺に行くと安心するというようなものをどうつくるか、多分課題はこの二つだと思うんです。

地域の包括医療・ケアにお寺の参加を

吉澤　お葬式ということで思いますのは今、少子高齢化の中で、どうやって地域で看取るか、あるいは地域の医療とケアをどう結び付けるかというのは、いろいろな地域の課題になっています。従来型のすべて施設に頼るということは当然できないので、例えばまた南砺の話になりますが、どうやって一人暮らしの認知症の人を、自分のところの地域で看取るかというのが、今の市長の一番の、最後の課題なんですね。それは市長自身、じいさんを看取ったときの原体験を感じているが故だと思いますけれども、そのときにお寺さんというか、宗教者の役割というのはすごく大きいだろうなと思う。

今、病院で看取ると、そのまま霊安室に行って、そのまま車に乗せられて、葬儀場のところで柩に入れられ、そこに親戚の者が集まってという、そういう世界になっちゃうわけです。僕も死んだばあさんのときを考えると、親族がみんな集まって足をさすりながら、ごっくんとして息を引き取っていく、そこには確か坊さんがいましたね。今のお話の、安心できる暮らしがローカルを支えていたというのはそういうことだと思って、そこでまた地域の包括医療・ケアみたいな話になったときに、最後まで行ったときに出てくるのは、きちんとその地域で看取れるかどうかという問題なんです。

吉澤保幸

例えば、お坊さんとお医者さんが一緒になって、ペアを組んで最期を看取る、そうするとそこにいる孫たちもじいちゃんが死ぬってこういうことだね、ばあちゃんが死ぬってこういうことだねということで引き継がれていく。こうした地域包括医療・ケアのいう話をNPOの先端医療の先生方に紹介しますと、たいていはどうして富山の南砺でそういうことができるのかという反応です。さっきお話したように、南砺にはお講がある。つながり合うということがずっと歴史的に積み重なっているわけです。それは内山先生のおっしゃる横のつながりであり、当然縦のつながりもつくれる。そして、そこにはやっぱりお寺さんがいらっしゃるということですね。

久間　私も県の医師会の方とか、市の医師会の会長さんと日ごろお付き合いさせていただいていますけれども、看取る形で終末期の方を引き取って最後、臨終として送るというようなときに、私どもと医師の方それぞれの役割が明確化してきて、言われてみると当り前ですが、医者は基本的に治すのが仕事なんですね。だから患者が「これから私、どこへ行くんですか」なんて、ふと聞かれたときに非常に困ると、そういうときにあなたたちはどういうふうに話すのかと聞かれる。だから、そういったことを共有、意見交換ができればということはあります。

今、臨床宗教師とか臨床仏教師という研鑽の場ができて、あの方たちはターミナルの現場に行って、実際にいざそういう時代が来たときに、自分たちが存在価値を発揮して社会に貢献できるというようなところを見据えて活動されているようです。これからひょっとしたら、そんなに遠くない将来に各地で、そういったモデルケースが出てくるかもしれませんね。

吉澤　それは本当にニーズとして高まっているし、それがないと本当の意味での地域の包括医療・ケアとか、地域医療というのが成り立たないと思うんです。どちらかというと、僕らの仲間のお医者さんで地域医療をやっている人は半分お経めいたことを言って、亡くなる前のじいさん、ばあさんの遺言みたいなものを聞きながら、ターミナルのところをやっている。だから今おっしゃったような、本当に実践的な学問としてのそういったニーズはすごくあるので、その看取り方も地域によって全然違うでしょうから、そういう知恵というのを地域で共有していくことは大事ですね。そういう気が最近特にします。

人が死んでいく場所としての地域

平子　今のお話に関連して、もう亡くなられてしまいましたが、宮城県の名取に岡部健先生がいらっしゃいました。「坊さん、もっと医療現場に来い」と私も厳しい励ましをいただいたのですが、「でも、先生、なかなかこの格好で入っていけませんよ。法衣では」というと、「いいんだよ、どんどん入っていけば」と言ってくれる先生で、介護で最期を看取るという在宅医療をずっとやっておられました。先生が最期を看取っていると、多くの人が「ああ、お迎えが来た」と言うそうで、医学だけでは説明しきれない部分が多いことに興味を持たれたそうです。それをきちんと研究しようと、東北大の宗教学研究室から社会学の研究者を職員として病院に入れて、その研究はまだ続いていると思います。

岡部先生は、現場に宗教者がかかわらなければ駄目だとの思いがあり、東日本大震災の契機も重なり、そこから東北大で始まった臨床宗教師養成へと展開してきているわけです。

それとは別に最近お聞きした話なのですが、歯科では最近、高齢者を対象にした訪問歯科のニーズが多くなっているそうです。最期を看取る場面において、身体に新たな治療は必要なくなっても、食べることは最後までケアが必要となりますので、最期を看取る立場として歯医者さんのニーズが増えてきているとの話でした。その高齢歯科を指導されていて実際に医療にかかわっている先生の話では、現場において患者さんから、来世のことなど宗教的な質問をいろいろされるので困ってしまうとおっしゃっていました。

それでは、どう答えていらっしゃいますかと聞きますと、私は嘘はつかないようにしていますと、自分の分かることは分かる、分からないことは分からないと答えますと、そうおっしゃいました。また、その先生は鶴見大学で学んだので、学生のときにもっと宗教のことを勉強しておけばよかったとしみじみおっしゃられていました。日本人が根っこに持っている宗教的な思いというのでしょうか、死んだらどうなるだろうかという思いにちゃんと対応する、そういうことの必要性をお話しになったので、とても印象に残っています。宗教者が医療の現場へ入っていく、そういう時代にだんだん変わっていくのではないかと期待しています。

藤木　そうですね、結構お檀家さんが医院や病院を経営されている場合は連携しやすい状況になっているという気がしますね。

内山　僕は毎年一、二回はお医者さんの集まりから講演を頼まれます。どうしてかというと、久間さんがおっしゃったとおり、お医者さんたちは治すことしか知らないわけです。だけど、いくら治しても最後は死ぬという、そこの部分には全く対応できない。どんなに頑張ったって二百歳も生きないわけですから、最後は必ず亡くなる。そのことを医者はどういうふうに考えていったらいいのか、自分たちの中に持っていたらいいのかということなので、大体頼まれるテーマは「死とは何か」というものです。

ただ言えることというのは、近代以前というふうに言ってもいいでしょうけれども、その時代は、死んでからのほうに永遠の世界があって、生きているということは、そこまで生きているだけの話というか、大体世界中そういう感覚を持っていたわけです。近代以降になると、死んでからは

どうでもよくなって、生きていることが絶対になった。ただ、近くの者が亡くなってみると、どうでもよくもなくて何か気持ちがすっきりしない。だから慌てて、お坊さん来てくださいなんて話になるということだと思うんです。生きている間はひたすら生きることに専念した、それは今でも続いています。

例えば、町づくりでもそうですけれども、生き生きとした町をつくろうとか、若者が活躍できる町をつくろうとか、全部生きる世界の話をしているわけです。だけど、本当の町というのは、実は町は人が死んでいくところ、人だけではなくていろいろな生き物が死んでいく場所です。それが町だったり村だったりするわけで、そうするともちろん生きている間は生き生きやっていればいいけれども、絶えずいろいろな人たちが亡くなっていく、あるいは鳥も虫も亡くなっていくわけで、そのときにみんなが穏やかに亡くなっていけるというのが、本当の地域というものだと思うんですよ。生きている間は頑張ったけど、最後は崖っぷちになってしまうというのは、本当の地域の在り方ではないんですね。

政治と宗教が共同して地域作りを

内山　お寺さんはいや応なく死という旅立ちの部分にかかわるわけですから、それをやりながら、社会を少し直していくという試みをしてほしいわけで、それはいわゆる社会変革とかいう話よりも、地域というのは生き物が亡くなっていく場所ということをちゃんと意識して、これからをつくっていこうねと。そういうことが意識できるようになると、社会の雰囲気はうんと変わっていくはずです。今、本当に死を遠ざけてしまったということだと思うんです。

吉澤　生きとし生けるもの、ともに生きる、だけじゃなくて、ともに死ぬということを考えなくてはいかんということですね。先生がおっしゃるように、死生観と言いますか、死というものにきちんと向き合う世界を取り戻さないといけない。さっきの南砺の総合戦略の一つですが、家で看取れるまちをつくるということが、今の市長の大きなスローガンです。そういうのは少しずつ地域づくりの中で言わざるを得ないというか、ある意味ではそれにちゃんと真正面から向き合わないと地域づくりにならないということに、心ある首長というか、本当に地域を守ろうという首長方は気が付いています。当たり前と言えば当たり前ですが、それをやるしかないというふうになってきている。

久間　私たちはどうしても役割上といいますか、死から生をつくり上げていくというか、ここから思考を立ち上げていく立場にあると思うんですけれども、首長さんができないことを私たちが地域で積極的に語っていく、伝えていくそうすることで、お互いの社会づくりというか、地域づくりということが、目に見えない形かもしれませんけど、共同し合える部分があるのかなと思います。

吉澤　それはあると思いますね。特に久間さんがいらっしゃる福島とか、仙台、宮城、岩手の首長方は、その都度向き合って、まちづくりをしていくんだということを必死で考えておられる。かなり皆さん、本当に心ある人は半分宗教者っぽい語り口になりますよね。

久間　実際よくある話ですけれども、あの世観ということが被災地ではよく語られています。被災者の方だけじゃなくて、支援者とか町の職員さんとかが普通の会話で、例えば仮設とか地域の集会場で集まりがあると、南相馬の話が出たりする。その辺、ちょっと冗談ぽく言う方もいますし、本当に真剣にうちの主人はどこ行ったんだろうとか、息子、娘はどこ行ったんだろうねと、あるいは孫はどこ行ったんだろうと話されるときに、しっかり答えていくことの重要性が人の命をつないでいくことになると思う。地域のそれこそ未来というか、そういったことにもつながっていく部分があるというのも感じます。

平子　今の社会では目に見えるものだけを対象とし、目に見えない世界を語ることはあやしいものとなってしまっているような気がします。宗教者の役割を考えた場合、見えない世界のこと、亡くなった人のことをきちんと認めるというか、きちんとそれを話していくということが求められているのではないかと思います。先ほどの吉澤先生のお話の死んでいける町といいますか、この町で死んでいきたいと思える町というのはやはり魅力的だと思いますね。

藤木　正木晃先生からうかがったお話ですが、宇井伯寿先生に始まった霊魂観の問題というのはかなり仏教界で間違ってとらえられて来た歴史があると聞いているので、それを元に戻さなければいけないと、また霊魂の問題をそのままにしておくのではなく住職としての見解を言わなければいけない時代にもなってきたと思います。だからお坊さんがそういうことを把握して、お檀家にきちんと伝えていくべきなのですが、どうもその返ぐらついているところがあるように思うんですね。

内山　それは妙に理論的に明確にしてしまおうとするところがあって、それがいけないのであって、仏教というのは、一面では矛盾したものを語り得ることによって、実は矛盾がなくなるというか、そういうものなんです。例えば、極楽往生という場合も多くは、自分の話じゃなくて近親者が亡くなったりすると極楽往生してほしいという、人に対する思いだと思うんですね。それはそれで大事にすればいいわけですが、だけど極楽往生したいとか極楽往生させたいというのも、いわば私欲なわけで、それもまた煩悩なんですよ。ですから、極楽往生したいだの何だのという気持ちそのものもどうでもよくなって初めて、仏教という言い方もできるわけですよね。

仏教は理論的統一の必要がない世界

藤木　矛盾は問題ではない。

内山　矛盾したものをどっちかに統一する必要なんか全然ないわけです。本当に家族が亡くなって極楽往生を願っているという人がいたら、それを手助けしてあげて何の問題もない。だけど、仏教の研鑽をしてきたという人間であるならば、自分の極楽往生を願っているんじゃ、ちょっと違うんじゃないですかというのが出てきたりもするわけです。そういう世界こそが仏教の世界だと僕は思っているんだけど、どうも近代以降になってくると、西洋から入ってきた合理的理論みたいなものに悪い意味で惑わされてしまって、仏教も妙にちゃんとした理論体系でなければいかんということになった。

人間たちの生きる世界というのは矛盾を抱えながら生きているわけで、それをある意味で許しながら展開してきたのが本当は日本の仏教なので、だから真宗なんかでもそうですけど、死後の世界はないと言い切ったりするけれども、そんなことも全然必要ない。死後の世界って何ですかと聞かれたら、先に亡くなられた知り合いが行っている世界です、でいいわけですね。だけど、死後の世界を怖がったり心配したりするのも、仏教を研鑽してきた人たちだったら、それはちょっと違うんじゃないですかと言えるかもしれない。なので、こんなものは別に理論的な統一なんか全然要らない世界なんです。そういうものをちょっと近代以降、だんだん踏み違えてしまった。

だから、いい意味でどういうふうに伝統回帰していくのかということが今問われていて、お寺もある意味で伝統回帰する。ただし、社会が変わっていますから、昔とそっくり同じことをやったら伝統回帰というわけにもいかないので、そこでは新しいお寺さんの試みをしていかないと、縦横のつながりの世界の中のお寺にならないということはあります。考え方としては、昔のお寺に戻る、ただ、やり方を新しく考えていくということだと思うんです。そうすると、考え方も理論だけでは説明できない世界を抱えて人々は生きているわけですから、それでいいわけで、そこにお寺さんも寄り添う必要があるという、それもまたちょっと方向を元に戻そうと、いろいろな意味で伝統回帰が必要ということです。

吉澤　われわれは今年のローカルサミットを倉敷でやりますが、倉敷も結構いろいろな宗教があって、金光教もありお寺さんも多いんですけれども、みんなで問おうとしているのは、政教分離についてもう一回問い直そうと思っています。暮らしの中に宗教とか

命というのをどう取り戻すかというテーマで、少し分科会で議論してみようという話が持ち上がっているんですね。それも含めて、最近ちょっと思っているのは、政教分離の理屈というのは、当然のことながら西洋の基準で、特に戦後の世界を中心とした、神道との関係も含めた歴史的なものですけれども、それを原理的に少し考えてみようということです。

僕なりにやや無理やりちょっと理屈っぽくいかと思いますが、整理すれば、宗教というのはどちらかというと死の世界を扱う。世のまつりごとというのは、人間の欲望を肥大化して、それを現世で実現していこうとするものですから、宗教というのは余計ものだと考える。そういうことから政教分離がある。また、宗教というのはどうも非科学だとすると、まつりごととという現世の科学的な世界に持ち込まれると困るというようなこともあって、宗教者と一緒にそれが逆に言うと、宗教者にとって何か妙な格好で、皆で日常の暮らしの中にもう一度一回祈りだとか、そういうものを取り戻すの嫌がられる。せない。そうしたことが、それがコミュニティーの中で、仮にハードルになっているとすれば、それをどうやって解き放つかということが、政教分離を問うということの一つの意味合いではないかかなんて、そんなことをつらつら仲間たちと話しています。

そういう意味で、先生がおっしゃるように、仏教というのはもともと矛盾を含みながら了解していく世界だというふうに考えれば、理論的科学的という世界をも包含するような世界なんですね、だから、そこにこだわること自体、非常に近代的なイデオロギーに拘束されちゃっているのかなと、そんなふうにも思うんですが。

政教分離が末端まで行きわたった不都合

内山　ちょっと古い言葉を使うと、権力と被権力、あるいは支配と従属でもいいんですけれども、そういうものがある程度分離してしまわざるを得ない世界があると思うんです。それが例えば国なんてことになると、いくら主権者は国民だといっても、われわれはそうそう口出しもできないわけで、結局権力を持っている人たちがある程度やらざるを得ない。そうすると、僕らは結果的に従属する人間という形になっちゃうわけです。だから、権力を持つ人間とそれに従うことになってしまう人間という、分離が発生する世界では、権力側が特定の宗教と結び付くというのはとんでもない誤りといえます。

ヨーロッパで言えば、中世の王様がキリスト教の名において支配をするとか、日本で言えば、戦前の国家神道というのは位置付けとしては宗教じゃないということになっているけれども、事実上、宗教と政治がつながる。これはとんでもない間違いということなんです。ところが小さな世界になってくると、権力者と被権力者が分離しない。それは僕のいる上野村だと、たかだか人口は千二百人ですから、そうすると分離が起きないと言いますか、多少意思決定する人がいたりしても、それもまたみんな知り合ってやっている世界なので、だから誰も支配されていないし、誰も支配していない世界なわけですよね。

もともとお寺と檀家さん、あるいは地域の世界もそうですが、別に誰が支配者でもないし、つまり分離しない世界です。多少発言力の大きい人がいるかもしれませんけれども、別にそれは支配者ではない。そういうところというのは、内部にある祈りの世界とか、人々の思いの世界とか、そういうものがとても重要な役割を果たしていくわけです。だから、それをちゃんと大事にすることが地域にとっても重要なんですね。

ところが日本の場合、戦前の国家神道とのつながりの問題があったものだから、戦後になると、末端に至るまで全部宗政分離となったわけですよ。「宗政」の「政」というのは、権力を発生させるようなまつりごともあるけれども、みんなして物事を決めていくぐらいのまつりごとというのがあるわけですね。それが地域の世界だったし、檀家さんの世界でもあるし、集落の世界でもあるし。ところが、そういうところまで全部宗政分離みたいなことをやってしまった故に、末端の地域社会がものすごくつくりづらいものになっているということなんです。

うちの村でも、何とか宗でなくても、山の神信仰から水の神信仰まで行政は手を出せないんです。これはやっぱり間違っているわけで、山の神信仰で権力と被権力なんて発生しませんのでね。

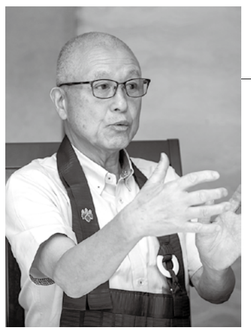
吉澤　それは今、地域をつくっていくときに、妙な足かせになっています。行政も動けないし、ローカルな連中もちょっと引いちゃうみたいなところもある。今おっしゃったような世界をどうお互いが了解できるか。これまではどっちかというと、まつりごととというのは全体のパイを広げて、それをどうやって上から下にすとんと落としていくか、それを合理的にやるのがまつりごとだったわけです。僕が学んだ政治学というのはそういう世界でした。

今はそんな世界はあり得ないわけで、どうやって地域の中で地域のコミュニティなりを、地域や自分たちの意思決定で地域をどうお互いにつくっていくかということからすれば、そこでは、本当に権力関係というのが足かせになる。それを逆にいうと、権力を振りかざしてまつりごとをやろうとすると、多分その首長の二期目はないというような世界ですね。そういうことからすると、下から積み上げていく中でもう一回、今の政教分離というものを自分たちの手で変えていかないと、地域づくりが多分難しいのかなというふうに思いますね。

久間　政教分離ということでは、今回の震災の復興支援活動の中で、今までは厳密に駄目だといわれていたような活動が、逆に行政の要請だったり、社協とか地域から求められて融合していった部分があるんですね。本当に内山先生がおっしゃったようなところが現実にあって、これまでは行きづらかったのが、被災した地域が、また被災者があまりにも大変過ぎるので、そんなこと言っていられないということになった。一人一人の世界観とか、宗教観とか、人生観とか、そういうものを大切にしながら、復興を一緒に歩んでいかなければならないと、そういうところに気付かされたと思うんです。

復興にみる人間の営みのはかなさ

吉澤　僕も南相馬の市役所に勤める若い知人がいますが、お父さんからじいさん、ばあさんまで亡くしたけれど、それでもほとんど家に帰らず一カ月間、市役所で頑張った。彼は本当に人生観を問い直しながら、そういうことを、どうやって行政のがんじがらめのくだらない枠組みから抜けられるかということを必死にので、市長と一緒になってやったのだと思いますね。だから三・一一は、近代の枠組みというものを、上からのトップダウンの世界を切り崩して復興に当たらないといけないわけですから、それをつむぎ直して、おのずと久間さんがおっしゃるような世界に踏み込んでいった。でも、それがまた少しずつ元の世界に戻ろうとしているところもあるので、それをもう一回ちゃんと拮抗しながらやっていかないといけないという構図になっていると思うんですね。


司会・藤木隆宣

久間　その辺、明らかに風化してきていると私も思います。この間の熊本地震もあって、向こうも大変な状況にありますけれども、被災地各地は今どういう状態なのか、そこに生きている人たちは一人一人どういう状態にあるのか、それを伝えていく責任があるということは強く感じているんですね。今日、先生方に教えていただいたことも、自分の言葉として伝えていきたいと、伝えていかなければいけないなと思います。

吉澤　熊本でも、知事が創造的復興を目指すと言っていますが、そこでも結構足かせになっているのは、三・一一のときにもあったような国の枠

組みで、復興というのは現状復帰の世界ですから、そこに創造的という言葉は出てこないわけです。それをどうやってやるか、実は知事がちゃんとイニシアチブを取れれば動けるんですね。その一番逆の悪い例が宮城県のような場合で、巨大防潮堤ができたりしている。そういうことからすると、首長が主体的に従来の枠組みをどう変えていけるかというときに、久間さんのようなお立場で、いろいろな格好でそういうのを伝えていく、問い掛けていくということは大事なことなんじゃないかなというふうに思いますね。

久間　熊本地震から一カ月ほどたった五月の半ばに現地に行って、いろいろな調整と活動をさせていただきましたけれども、県の対策会議も夜七時から毎日やっているというので参加しました。その中であった話で、壊れた家電などの震災ゴミが街中で溢れているのに、リサイクル法の問題があって行政の職員は法律上あつかえませんと。」

吉澤　それで終わっちゃう。

久間　ごみ捨て一つ、がれき一つ、市の職員が扱うことができないので、それをボランティアに丸投げしているような状態だったんです。こういう状況のときには超法規的に対処しないと、いつまでたっても復興のふの字も進みませんよと、喧々諤々になった。法律といのは平常時を想定してのものですから、その辺の意識変革が必要です。

吉澤　今ちょうどがれき処理をやっている環境省のトップの部長が僕らの仲間で、一方で九州の経済産業局長も僕らの仲間ですので、今のような現状は、改めて伝えますけれども、本当に法律の枠組みは単なる現状復帰の世界ですからね。お金は出ても、結局無駄なお金になっちゃう。

内山　おっしゃるように宮城の辺り、巨大な防潮堤ができています。以前から知り合いの内藤廣さんという二、三年前に東大を定年退官した建築家がおられますが、この間、彼と公開の対談みたいなのをやって、彼自身は防潮堤には反対なんですね。しかし、現実にはどんどんできている、その写真を見ながら彼が言ったのは、「まあ、いいか」と。というのは、コンクリートの固まりで最大限のメンテナンスをやって百年持つそうです。逆にいうと、百年以上は無理で、メンテナンスをやらなかった場合、大体五十年でおかしくなってくるという。

今後五十年間、日本にちゃんとしたメンテナンスをやるだけの資金があるとは思えないので、多分五、六十年で風化し始める。だから、彼の気持ちとしては「まあ、いいか」となる。だから、あれを造っていいのかどうかという話は別として、人間が造ったものなど所詮五十年、長くて百年で滅んでいくわけです。そんなものに血道を上げていて、なんと無駄なことをしているのかと、そのあたりの感覚を僕らは忘れてしまったんですね、現代社会は。

花一輪咲けばいい。

臨床宗教師の役割

日本臨床宗教師会　副会長
金田諦應

平成23年3月11日午後2時46分東日本大震災発生。大津波は多くの命と財産、そして思い出までも奪い、あとには生と死の狭間で苦悩する人々が残された。

生とは！死とは！答えのでない問いが突きつけられる。生き残ったことには必ず意味がある、そう言い続け、その意味を考えながら共に歩む覚悟を決める。

私達の使命。それは破壊され、凍り付いた時間と空間を再びつなぎ合わせ、共に未来への物語を紡いでいくこと。

瓦礫の中にほっとする空間を作る。そこに心を動かす様々な仕掛けを置く。人は位牌の前で命の繋がりを語り、お地蔵様の前で奥底にこびりついた感情を吐き出す。そして未来への物語が少しずつ動き出す。

夫を失った女性。津波は、避難誘導している夫を海の底へと引きずり込んだ。一緒にお地蔵様を作る。メガネをかけ、微笑んでいる夫のお地蔵様に向かい、心の奥底から叫ぶ。「あんたはいつも人のことばかり考えている、私のこともすこしは考えて！」人目をはばからず泣き出した。今まで心の奥底に閉じこめていた想いが吐き出された瞬間だ。人知れず泣く事と、人前で泣く事のとは大きな違いがある。彼女の悲しみの物語は、私達の物語へと繋がり、背負っている悲しみの重さはほんの少しだけど軽くなった。

父との折り合いが悪いままお別れしてしまった事に悩む女性。3年後の春、父の大切な花壇に、一輪の花が咲く。潮を被り花は咲かないと諦めていた。その場所に花が咲いたのだ。それを見ながら、「私ここで父と一緒に生きていける」そう確信したという。一輪の花が未来への物語を動かしたのだ。

人には未来への物語を創造する能力、大きな命の源に繋がる能力を持っている。その能力をひたすら信じ、それぞれの物語が動き出すまでじっと待つ。宗教者には物語が展開していく「場」の創造、その「場」に留まり続ける「耐性」、そして個々の人生に添って創造される物語を受け止めるレンジの広さが要求される。悟りや救いを饒舌に説く事は、教義の自己満足になっても、一人一人の救いにはならない。宗教・宗派的な文脈で語られる「救い」ではなく、その人の物語の文脈で語られる「救い」が自然に落ちてくるまでじっと待つ事が求められるのだ。

傾聴活動は「自他」の境界線を越える作業である。「場」は悲しみを引き寄せる「磁場」となり、そして「慈場」へと変化する。しかし「慈場」は同時に「悲場」なのだ。「慈悲」は厳しい言葉。切に他を想う心は同じ強さで己に返る。そこから「覚悟」が問われ、その覚悟を支える「戒律」が命の奥底から湧き起こる。

揺れ動く現場からは、常に自己の信仰が問われ続ける。信仰は、問いと答えが循環する事によって深まっていく。これが臨床に於ける宗教者の姿だ。

私達の姿を、己の生死と向き合いながらじっと見つめていた医師がいた。故岡部健医師だ。彼は、看取りの現場から立ち上がってくる多様な「物語」と向き合ってきた。やがて公共空間で他業種と協働出来る「臨床宗教師育成」の想いへと向かっていく。

岡部医師に賛同し、被災地で同じ想いを抱えながら立ち続けた宗教者が集まる。そしてそれが宗教界や医療界を巻き込む大きなうねりとなり、各地の大学に臨床宗教教育プログラムが立ち上がる。大きなうねりを確かなものにするために「日本臨床宗教師会」が発足した。教育プログラムや、そしてなにより臨床宗教師が遵守すべき「倫理綱領」を共有する。それは「政教分離」の印籠によって、宗教を公共空間から排除してきた日本社会に、宗教の役割を復権・実装する為に必須の事である。

会の組織化や資格認定制度は、様々な弊害を生み出す可能性がある事も承知している。乗り越えなければならない事が多い。志を同じくする、あらゆる立場の方々の参加を切に望むところである。

臨床宗教師の役割は「風」かもしれない。風はどこからともなく吹き、花一輪を咲かせ、人知れず去っていく。そして人々は風の存在を忘れてしまう。

「花一輪咲けばいい」それでいいのだ。

仏教企画通信

ご支援寺院名

H28.8.1～9.30

所在地	寺院名（個人名）	金額
神奈川県	正信寺	10,000
福井県	妙徳寺	3,000
愛媛県	高昌寺	10,000
合　計		23,000

手まり学園

寄附者御芳名

H28.8.1～9.30

所在地	寺院名（個人名）	金額
神奈川県	青木義次	5,000
神奈川県	正信寺	20,000
宮城県	光厳寺	10,000
岩手県	円城寺	3,000
愛知県	小島璋允	15,000
佐賀県	地福寺	5,000
神奈川県	本覺寺	10,000
秋田県	円通寺	8,000
山形県	長應寺	10,000
神奈川県	青木義次	5,000
岩手県	廣徳寺	10,000
青森県	大乗寺	10,000
千葉県	宗胤寺	10,000
東京都	泉岳寺	50,000
群馬県	泰寧寺	50,000
静岡県	可睡斎	20,000
東京都	天寧寺	10,000
静岡県	宿蘆寺	20,000
合　計		271,000

仏教企画発行の刊行物

（★部数により割引があります）　すべて税別価格です

『修証義』解説	丸山劫外著	1,400円★
『うたい継ごうよ、子守唄』	長田暁二・西舘好子共著	1,200円★
『まんが問答一期一話』	文 平和宏昭 まんが 垣内敬遠	1,200円★
『道元禅より見たる般若心経解説』	長井龍遺著	2,200円
『葬送のしおり』	長井龍遺著	30円
『わが心の釈尊伝』	須田道輝著	1,800円
修証義読本『生老病死』	須田道輝著	500円★
『曹洞宗檀信徒経典』	須田道輝解説	300円★
曹洞宗檀信徒必読『供養のすべて』	霊元丈法著	140円★
曹洞宗檀信徒必読『葬儀のすべて』	霊元丈法著	150円★

＊『仏教企画通信』を10部以上購読希望の方は一部100円で頒布致します。
同封はがきの空欄にその旨をお書きください。（消費税、送料別）

曹洞禅グラフ

発行日	
春 彼岸号	2月20日
夏 お盆号	5月30日
秋 彼岸号	8月30日
冬 正月号	10月30日

1部 200円

9部以下	200円
10部以上	150円に割引
20部以上	135円に割引
50部以上	130円に割引
100部以上	120円に割引
200部以上	110円に割引
300部以上	100円に割引
500部以上	90円に割引

お申込み

仏教企画

〒252-0113　神奈川県相模原市緑区谷ケ原2-9-5-5
TEL: 042-703-8641　FAX: 042-783-0989　Email: fujiki@water.ocn.ne.jp

※ご寺院名後の番号（3桁もしくは4桁）がお客様番号（コード）になります。
お申込みは　①ご寺院名　②お客様番号　③電話番号でも可能です。

編集後記

僧侶、お寺、本山、包括法人曹洞宗いずれも取り巻く社会があって、そのお陰で私達は成り立っています。

今、私達を支えているその社会が急速に変わろうとしています。いや、すでに変わってしまったのかもしれません。

現代は日本の人口形態が逆三角形になり、毎年人口が減少し、家庭が崩れ、地域社会が崩れ、仕事も安定しなくなると日本を支える力が弱くなります。

このことは私達を支えてくれた基盤も弱くなりつつあると言えるでしょう。

さて、私達お寺はどうあるべきなのでしょうか。

知り合いの40代女性の話です。「両親は曹洞宗を信仰しお墓もあるので、お葬式は菩提寺の住職にお願いしたいと思っています。でも自分のお葬式はお寺さんにお願いする気持ちは今はないです。日常生活でお寺さんとほぼ関わりはないし子供達への負担を少しでも減らしたいからです。ただ年齢を重ねれば気持ちが変わるかも　知れないとは思っています。」

この方のように考える年齢層は50歳～60歳以下でお寺との縁が普段ない方でしょう。特に都会地ではこれから20年から30年後にはお葬式はお坊さんにと思う方々がさらに少なくなると予想できます。

私は、お寺にとって今こそ仏事以外にも地域の核になる働きをするべき時代が来たと思います。

日本の社会は自然と生きる人と亡くなった人との社会として作られていました。

今こそお寺は地域社会の求めにこたえることが大事です。

それぞれのお寺の立ち位置は違いますので、それぞれの立ち位置で取り組みが違うことは当然です。

たまたま、わたくしは神奈川県相模原市緑区に新しいお寺を建てたく計画をしています。

その計画は次の通りです。

運営内容概略

①仏事について（準都会地）
- 家族葬の新しい形（キャッチコピー）
- 基本は『家族葬のコーディネイト』
- 家族だけのささやかだが、心のこもった仏事をする

②精進料理レストラン

③講座（講師は予定）
- お寺ならではの内容を優先する
- いろんな年代の人が出入りするのが良い
- 地域性を生かした企画、例えば人気引率者のウォーキング企画など

1.俳句　津久井湖では10名以上の予約で屋形船に3時間くらい乗ることができる
山あり谷ありで吟行できる。都内では出来ないことができる

2.地域の歴史（仏教文化と地域の風土をメインに）　松本先生
ターゲット　リタイアしている男性（この層は行き場所が少ない）

3.禅による瞑想　キラーストレスを減らす。坐禅しなくても瞑想だけでも良い

4.写真　石原先生　写真を撮ることによって自分の心を開放する

5.歌　木村先生　みんなで歌う事は脳に作用する。歌うだけで認知症を予防できる

6.写仏

7.精進料理教室

8.なぜ葬式が大事か　正木先生　形だけのお葬式にしない

9.哲学　内山節先生

10.写経　高橋先生

11.宗教全般　正木晃先生など

12.山水画　特別プログラムを組んでみる
（仏画を描きそれを仕立て、自宅に小さな床の間を作るなど）

13.子供プログラム　夏に始動。宿題をみる、工作をつくる、天体観測など

④地元目線での活動
- 子育て支援の場を作る
- モデル事業として「子供茶堂」

子供文庫
子供食堂の提供（親の帰りが遅い子供のために）
子育て中のお母さんが集まる場にしたい

「子供茶堂」とはいろいろな人が行きかう場
目的：子供の居場所作り
- 小学生だけでなく、中学生にも場を提供してあげる
- 親が出来ない子供文化応援の場をつくる
- 美大生にアルバイトに来てもらう（紙や葉っぱなど沢山準備して）
- 日庭寺に行けば遊べる、悩みを解決できると思われるようにする
- 子供が来れば親もくる

⑤学生にギャラリー提供
多摩美や造形の学生にギャラリーを企画・運営してもらう
学生が世にでるためのきっかけとなれば良い
実力のある学生は日庭寺ギャラリーでデビュー